松山幸生先生講述

全32回ー31

ヘブライ人への手紙に学ぶ

2024年02月

1996年1月から1998年10月　　写者　小原靖夫

第31回　恵みがあなたがた一同と共にあるように

第13章㉒節から㉕節　　結びの言葉

㉒兄弟たち、どうか、以上のような勧めの言葉を受け入れてください、
　実際、わたしは手短に書いたのですから。
㉓わたしたちの兄弟テモテが釈放されたことを、お知らせします。
　もし彼が早く来れば、一緒にわたしはあなたがたに会えるでしょう。
㉔あなたがたのすべての指導者たち、またすべての聖なる者たちによろしく。
　イタリア出身の人たちが、あなたがたによろしくと言っています。
　恵みがあなたがた一同と共にあるように。

今日は㉒節から後の大変短いところになりますが、そのところを皆さんとご一緒に、やや丁寧に味わってみたいと思います。最後の最後のところで、こんなところにどんな解釈があるのかなと思われるような短い文章ですが、これらの文章に秘められている色々な問題を、今日は考えてみたいと思うわけです。

第㉒節前半
兄弟たち、どうか、以上のような勧めの言葉を受け入れてください。

この節の冒頭では「兄弟たち」という親しい呼びかけがなされています。こうした呼びかけは、この手紙の中では、改まって自分が何か大事なことを言いたい、是非に聞いてほしい、という時に使っているように見受けられます。

例えば、３章の①節とか⑫節、あるいは10章の⑲節というところで「兄弟たち」という呼びかけから文章が始まっていますが、そこでは続いて、著者が「自分（私）の中にある信仰によって」と記されていますから、そういう意味で「私がこれから、あなたがたのことを切実に覚え、大いなる期待をもって語りかけますから、どうか受け入れてください。」という思いを込めて、呼びかけをしているのだと思います。

ある人たちは、この部分は恐らく後世の付け足しなのだろうと言い、そう思っている人たちは沢山おられます。
というのは、「手紙」という形式に対して、ここでは「勧めの言葉、勧告」として語っているのだから、「手紙の部分ではなく、それを勧告として受けとめた人が、ここに付け加えた補足ではないか」と言われているのです。

しかし私は、この手紙自体が全編にわたり、勧告の部分と、それに伴って具体的にその事柄が展開している部分という骨組みによってできていると思っています。つまり、教理的な事柄を語っては、そのことに解説を加えてゆくという形式で、この手紙はずっと継続されて来ているように思えるのです。ですから、その意味では「『勧めの言葉』というのは、この手紙自体がもっている『一つの特性』なのだ」とも言えると思います。

ですが、私は、そんな議論よりも、むしろ「勧めの言葉を受け入れてください。」と言っているくだりが、すごく大事な部分ではないかと思うのです。
そこには「著者が語っている言葉、神から示されてあなたがたにお勧めしている言葉を、『神の御言』として受け入れてくださいという願い」があると思われるのです。
そのように考えてまいりますと、これは、主日毎の礼拝説教を、一体どのように聴いたり受けとめたりしているのだろうか、あるいは、私の場合ですと、どういうつもりで語っているのだろうか、ということに繋がってくる問題なのです。321

ここで著者が書いた手紙にしても、私のように講壇から語る説教にしても、それらは当然、今という時代を生きている、ある意味では「罪責を赦された罪びとであり、主に贖われた存在である一人ひとりの人間を通して、語られる言葉」に他ならないのです。
ですから、そういう意味では、説教そのものが神の御言だということではなく、それを説き明かすのは、あくまでも、御言を預かる人間の役割なのです。

故に、説教というもの、ここでは「勧めの言葉」と称されている言葉そのものは、「神によって語ることを許された人間が、神の御恵みにより示された御言を、その人間の知情意を尽くして選び出す言語を駆使して説き明かし、人々に語っている」、そういうものなのだろうと思います。

ですから、「人間の言葉は、その人間の有する限られた言語でしかない」けれども、「神がそれを用いて、一人ひとりの心に働きかけてくださるように」という祈り願いをもって、その言葉を十分に吟味しつつ語ってゆく時に、神がそれに意味を持たせられ、説教者の言葉を生かされる。一方、聴く者を罪への気づきから、主の赦し、解放へと至らせ、その人を喜びに満たし、その人の人生を幸いと成してゆく。そういう『御霊の働き』がその言葉に伴う。そういうことを説教者が信じ感じ取って語ってゆくのでなかったならば、説教は説教にならないだろう。

また、聴く者も「あれは、あの先生が語っている言葉だ」という姿勢で聴くのではなく、説教者の言葉を通して「神が私にどのように働いてくださるだろう」と期待しながら、『神の御言と出会う』のでなかったならば、説教は説教にならないだろうと思うのです。
この著者も、終わりの部分で「今まで、縷々（るる）述べて来たけれども、それが、私の言葉、私の励まし、私の勧めとしてではなく、この言葉を通して働いてくださる神の御言として、あなたがたの心の中に新しい変革を起こし、新しい力を与えてくれるように、そのような

止むに止まれぬ願いと祈りをもって、私はこの手紙を書いたのです」という最後の意思表示を、ここで為しているのです。

そんなことを考えながら色々なものを読んでいましたら、1536年、大分昔ですが、スイスの改革派教会が行なった「一つの信仰告白」に出会いました。
それをスイスの教会では「第一スイス信仰告白」と呼んでおり、スイスの教会が最初に作った信仰告白なのですが、その第１章④節に次のような「大変興味深い告白」が書かれているのです。それは、
「私たちは、今日、神の御言が教会において、正しく任命された説教者によって語られ、そして、そのような御言が私たちに届いた時に、神の御言が宣べ伝えられ、信者に受け入れられたことを信じます。」というものです。

大変丁寧な言葉です。今の時代の私たちが出会う様々な出来事や状況に対して、教会員の祈りと推挙によって立てられた説教者が、教会での正規の手続きを経て、その事柄を語ったならば、私たちは神の御言が正しく宣べ伝えられていると信じて受けとめよう。その人の思いで語った言葉ではなく、神がその人に語らしめておられると信じて、その言葉を受けとめよう。そして、それぞれ信仰をもった人々がその言葉によって更に新しくされ、奮い立たされ、清められ、調えられていくことを信じることによって、私たちの信仰告白が成立する、と宣言しているのです。

私は、この手紙を読んで行くと同時に、この告白文にも出会って、「スイスの教会の告白が、今また求められているのではないか。かつて、スイスで起こったことだけれど、それが、ここでも求められているのではないだろうか。」と考えるのです。
そして、この信仰告白を読んだ人々が、「この勧めを通して、神が働いてくださり、神が御心を示してくださり、神の願望が告げられているのだ」と信じ、更に、この手紙の著者のことも「神の御言としてそれを受けとめてくださるように、という願いと祈りとをもって、この勧めを書いたのだ。」と受け取って頂けたら、幸いに思います。

「教会の中で語られる言葉が、神の御言として受けとめられていく、意味付けられていく、価値付けられていく、あるいは、特別な立ち位置を与えられてゆく」ということは、そういう意味でとても重要なことだと思います。
例えば、語る牧師が高名な先生だから、それゆえに神の御言が御言として語られているのではなく、<u>その方の言葉を聴いた人たちが、神の御言として真っ直ぐに受け入れるという姿勢（空の受け皿）がなかったなら、その言葉は神の御言にはなり得ない</u>のです。
また信徒一人ひとりが神の御言として受け入れたいと願っていても、語る側が本当に神の御前に打ち砕かれて、深い祈りの内に良い備えをして語る言葉でなかったなら、それは神の御言にはなり得ません。「牧師も信徒も互いに、神の御前に相応しく調えられてゆく準備プロセスがなかったならば、説教は説教として成立しないのだ」ということを、ここに、もう一度覚えておかなければいけないと思うのです。

別な言い方をすれば、神の御言を語ろうとか、神の御言を証しようなどと肩肘を張って構えなくても、ごく自然に、神の御言を聴き、祈りつつ歩んでいる人々の信仰生活を通して、神の御言に生きていることが多くの隣人の目に証しとして活き活きと映ってゆくのです。その人が意図したからとか、願ったからとか、懸命に頑張ったから、というのではなく、神御自身が、真実に神の御前に生きている人を通して、いつでも働いていらっしゃるのだということが、ここでは信仰者の大切なバックボーンとして語られています。

そのように神が働かれ、神がいつでもそのことを心に覚えられ、御心に添って押し進めていらっしゃると平らかに信じ、常に感謝と喜びをもって受けとめる生きざまを進めているならば、それはいつでも神の御言に生きることとなり、神の御恵みとなり、神の御力ともなっていくのだと思います。

では、以上のような勧めとは、一体どんなことだったのか。
今までのところを振り返ってみれば、先ず、「神の御言に聴き従うように、という勧め」がなされているのです。
「神の御言」とは、この著者の立ち位置から言えば、「御子イエス・キリスト（その御降臨から御再臨に亘り、人類の救済という神の歴史の担い手）において、後にも先にも唯一度、究極的な形で、生き働かれた神の御言である」と定義しているわけです。

それを言い換えますと、イエスは、私たちの罪の贖いのためにこの世においでくださり、御自身の犠牲の御血を携えてお立ちになった、世にまたとない大祭司であられた。そして天の聖所にお入りになられ、今や、私たちのための救いという形を具体的にこの世に与え続けておられる御方、それが大祭司キリスト論の中に登場されてきた御姿なのです。
ですから、この著者が描いている「イエスの贖いを中心とするキリスト論」は、ヨハネによる福音書の中に出て来る「ロゴスキリスト論」よりももっともっと大きな、魂の射程を持っているのです。
「言が肉体となって、私たちのうちに宿った、そして、その言は私たちを活き活きと神に結び付けてくださった」というのがヨハネによる福音書１章ですが、それ以上に、この手紙では「その御方は贖いのために死なれ、しかも三日目に甦られて、今や天にあって私たちのために働いていらっしゃり、『再びおいでになる御方』なのだ」というところまでをキリスト論で捉えているのです。

そのことを、簡単に皆さんと復習し、確認しておこうと思います。

第一番目には、この手紙の9章㉘節には「キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、究極の救いをもたらすために来てくださるのです。」と記されています。
ヨハネによる福音書では「再臨の問題は、ロゴス論の中には入って来ない」のです。
更に、この手紙では、「再臨のキリストが救いを完成なさるのだ。十字架の贖いを信じることによって、既にこの世において救われている状態にある私たちは、この来たり給う主

によって救いが成就する、という勧告を真実に受け入れ、御前に立てる者となるのだ」ということを述べているのです。

第二番目には、大祭司キリスト論がここに語られていて、「その大祭司キリストを見上げながら、恵みの御座に近づいてゆきましょう」と力強く述べているのです。
恵みの御座に近づくとは、近づきつつある大迫害を乗り切り、耐え忍んで、キリスト御自身の御座に近づこうではないか、というお勧めなのです。
厳しさの中で尚、神イエス・キリストはあなたを愛し、あなたを支え、あなたを見守り、「あなたのために、もう一度おいでくださるのだ」ということを力強く宣べ伝えずにはいられない、そうした緊迫感を持ちながら、この手紙は書かれていたことも覚えておいて頂きたいと思います。

第三番目の要点は、少し前の学びで出て来たところですが、「あなたがたは耐え忍んで、宿営の外、営所の外に出てゆきましょう」ということです。[328]
キリストは、エルサレムの都の中で十字架におかかりになったのではなく、エルサレム郊外のゴルゴタの丘で十字架にお架かりになったのだから、本当の救いは営所の中にあるのではなく、外にあるのです。ユダヤ教で凝り固まった連中の思いの中では、到底救いはないと言われていた、あの聖いエルサレムの穢れた外側にこそ、真の救いがあったのです。
だから、私たちも、自分たちの教会内の業や行いによってのみ清められようとして、小さく固まるのではなく、キリストの御体としての教会を持ち運び、『外に打って出』、むしろ、この世の尺度における穢れや罪、滅びに定められている人々の中に身を置くことによって、キリストの救いがそこに完成してゆくことを喜び、証しし、訴え、またそれを宣べ伝えてゆこうではありませんか。その時こそ、キリストの救いは身近なものとして、「然り、アーメン」となるのですから。

㉒節前半の「**そういう勧めの言葉を受け入れてください**」とは、
かつて自分たちが救いを（凝縮させた形で）選民だけのものとして捉えようとしていた発想が打ち砕かれて、「真に神の御前に救われた者、福音を宣べ伝える者、イエス・キリストに従う者、更には、律法を超えた者として、与えてくださった救いと贖いを、多くの人たちに宣べ伝えてゆこうではありませんか」という「勧め」が受け入れられることを願っているのです。[329]

第㉒節後半、
実際、わたしは手短に書いたのですから

まあ、著者は第13章まで書いて来て、「手短に書いた」とは何だろう、と思いますが、そのような救いの奥義を語ろうするならば、ヨハネ福音書の言葉を借りて言えば「全世界もそれを書き記したものを収めきれないだろう」というほどの要点という要点が存在することを知り尽している著者です。だからこそ、キリストを通して与えられるすべての御恵み、すべての御言を、どうかしっかり熟知してほしい、御霊の導きにより、それらすべて

の奥義に精通してほしい、それを知り尽くしてほしいという「切なる願い」を持つ一方で、「その達成の難しさと、それを期待する相手へのもどかしさ」を感じて、あえて「手短に書いた」というような表現にしたのでしょう。

ですから、この著者は、自分が書いて来た手紙で、もう十分だとは思っていません。
大祭司キリスト論を述べたにしても、色んなことを語ったにしても、これはその中のほんの障りだけ、一番大事なポイントだけを書いたのですから、どうかそのポイントを通して更に深くキリスト・イエスとの関わりを、そして神がキリスト・イエスを通して成してくださった御業を汲み取ってほしい、学び取ってほしい、受け入れてほしい、いや御霊の助けによってそれを感じ取ってほしい、「そういうふうに願い続けながら、私はこの手紙を書いたのですよ」と訴えかけているのです。

結局、「聖書(この場合は旧約聖書)の登場人物と、キリストの証人たち、そういう人たちを通して神が働いてくださっている様々な御業を、どうか具体的に自ら聴き、読み、味わい感じ取り、知って頂きたい、私自身はそのことを全部書こうとしても書き切れるものではありませんから」と、「手短に書いた」と記す著者は読者に訴えかけているのです。

ところで、「説教とは何か」ということを私たちの地区の牧師たちが集まって勉強会をしたことがありました。結論は「説教とは、キリスト・イエスの救いの宣言だ」でした。
しかし、あなたは今赦されているのだ、愛されているのだということを目の前に集まっている信徒一人ひとりに「ああ、そうか！」と分かるまで語ろうとすれば、10年かかっても20年かかっても説教は終わらないだろう。結局は、キリストがその究極的な姿として見せてくださった贖いの十字架を指し示し、そして復活によって与えられた新しい命の中に生きているのだということを示していくことぐらいしか、一人ひとりの説教者の説教人生は与えられていません。

<u>だから、毎回毎回同じことを語るようになる</u>かもしれないが、それは単に繰り言ではありません。ひるまないでそれを語り続けることによって、養うべき信徒の群れが、その言葉を通して、彼らなりに新しく神との出会いを経験し続けるならば、きっと彼らは救いに到達できると信じて、語り繰り返すことだからです。
確かにイエスがなさった御業や赦しや贖いについて、私たち牧師が信徒一人ひとりに分かって貰えるまで語ろうと思ったら、とても日曜日毎の僅かな時間では語り尽くせないような、大きな御恵み、大きな賜物、偉大な御言が秘められているわけですから。

でも、そのためにこそ「聖書」が与えられているのです。その聖書の御言を正しく神の御言として語り、そして、それを聴いた者が触発され、与えられた大きな御恵みの喜びを証ししてゆく。その連鎖は、正に区切りや終わりの無い、果てしない働きでありますから、個々の説教者は、著者の言うように「手短に語る」以外ないだろうとも思われます。

第㉓節、

わたしたちの兄弟テモテが釈放されたことを、お知らせします。
もし彼が早く来れば、一緒にわたしはあなたがたに会えるでしょう。

「**わたしたちの兄弟テモテが、釈放されたことをお知らせします**」も大変短い言葉ですが、これもとても大切な言葉だと思います。神は、テモテを愛して、守って、彼のすべてを調えてくださっています。そんなことを聖書の中でいつもお聞きするわけですが、この手紙でもそれを記しています。

10章㉓節、㉔節に、
「**約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を、揺るがぬようにしっかりと保ちましょう、互いに愛と善意に励むように心がけ**、云々」とあり、ここでテモテのことに触れて、先ず「神が約束してくださったことはいつでも、それを確実なものにしてくださるのですから」という保障をした後に、「実際、捕らえられた人たちと苦しみを共にしましたし、また、自分がもっと素晴らしい、いつまでも残るものを持っていることを弁えているので、財産を奪われても喜んで絶え忍んだのです」と。これは、当時の状況の中で迫害を受けた人のことを書いているのです。

この御言のすぐ後には、㊱節「**神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要なのです**」とも。テモテもそういう意味では、投獄され、そして艱難を受けたという苦しみを味わっている。けれども、その忍耐は、正に彼にとっては喜びであり感謝なのだ。神がその中でこそ彼に与えてくださる御愛、その真実は、今、自分たちがどんな目に遭っているかは問題ではなく、「それを超えて神が何をしてくださるだろうか」に目を注ぐ時に、はっきりして来るのです。

今、私たちが置かれている状態だけを見て、「こんなに熱心に信じているのに、神はこんな目に遭わせて！」と嘆くのではなく、こんなにも熱心に信じている私たちをこのような目に遭わせられるとすれば、「これを超えれば、神は何をくださるのだろうか」と期待と希望を膨らませて、今の時代を生き貫いてゆくことが肝心なのです。

これから起きる大迫害の中でも、「そのことを通して与えられる神の大きな御恵みに目を向けて生きることが、あなたがたの信仰なのですよ」と述べているのです。
「信仰とは、今を主と共に生きていること、そのものであって、報いを目指し生きること、報いに期待することではない」という『キリスト教信仰』がここに出て来るのです。333

一般の宗教がもっている信仰というのは、「信じたから良いものが与えられました、だから信心は意味があります」という在り方をするわけですね。キリスト教信仰はそうではありません。神を信じていればどんなに大きな御恵みを頂けるかは、神は既に信仰人生を通して私たちに示してくださいます。そして、あなたがたは信じて耐えられるようになったので、新たな艱難が与えられます。そして、その艱難を通してこその、更に大きな御恵みを報いようと、神は用意してくださっているのです。

事実、テモテは、そうした艱難の中にあったけれども、今や彼は釈放されました。どうしようもなく厳しい状況の中で彼は投獄されていたのに、今や神は、彼を自由な者にしてくださいました。そして、獄を出るや彼は、「できることだったら、私も一緒にあなたがたのところに行きたいと願っています」と、新しい課題への出発を告げました。

第㉓節後半
もし彼が早く来れば、一緒にわたしはあなたがたに会えるでしょう。

神が与えてくださる御恵みとは、「絶望の現実の中から、それと全く異なる、神の現実を展開してくださること」です。
投獄されて獄に繋がれるという、もう絶体絶命の状況の中から、神はその信仰によってテモテを釈放し解放してくださいました。「あなたがたの前にこんなことがあっても、神は守ってくださいますよ」という証しを立てる者にしてくださいました。その恵みにどうか一緒に与ってください。そういう信仰に生きてくださいと、ここでも訴えるのです。

この時代において「信じることと、忍耐するということとは、ほぼ同じ意味をもった、同じ強さをもった言葉』として語られています。「神を信じるのであれば、現実の中にある様々の矛盾や、迫害、様々な不都合を、意味あるものとして耐え忍んでください。なぜなら、キリスト御自身がそうした欠乏の中をあえて歩まれたのですから」と。

「空の鳥には巣があり、狐にはねぐらがあるのに、わたしには枕するところもない」と言われるほどに、キリストは多くの者たちから阻害や迫害を受けられた。キリストは生まれられた時にも本当に宿るべき家を持たず、憩うべき御自身のためのしとねもなかったのに、旅先で「人の子」となられた。それは「そのように宿るべきものもなく、憩うべきしとねも持たない人々と共に、神の御恵みはあるのだ」ということを伝えるためであったとこの著者は捉えた。そしてそのことを通して、そういう立場に置かれた人々が「人の子」なる神の御救いを確認することができ、確信することができるようになったと考えた。

言い換えれば、「キリストの御降誕の現実から始めて、キリストが十字架の贖いを完成されて、甦られ、天に帰られるというすべてのキリストの行程を見通して、これが、神を信じる信仰のゆえに耐え抜かれた忍耐の人生であられたのだ」と捉えているのです。

正に、キリストの御生涯というのはそのようだったのです。多くの人々に分け与え続ける道を喜び、御父に感謝されて歩まれました。そのように与え続けて生きるほど、豊かに祝されていくことを知ることが、信仰なのです。そのことが、この手紙の中で語られているのだと思います。
ですから著者は、「あなたがたは、そういう意味でテモテが釈放されたことを同じように喜んでください。 神は確かに彼を守っていてくださったのだという証しを、あなたがたも喜んで受け入れてください」と勧めるのです。

第㉔節の前半、

あなたがたのすべての指導者たち、またすべての聖なる者たちによろしく。

「すべての聖なる者」という言葉で書かれていますが、これは、すべての聖徒たち、あるいはキリストによって生かされている人々というような意味です。「聖とされた者」と言ってもいいだろうと思います。例えば、すべての聖徒、教会に集まっているすべてのクリスチャン、これらを呼んで、それが「聖なる者」だと言っているわけです。

この「聖」という言葉は「神によって区別された者、特別な者」という意味で使われて、おり、同時に「聖められた者、聖い者」という意味も持っているのですが、何がその聖さの保証なのでしょう？　無論、私たちの中には聖さの保証など、どこにもないのです。しかし、私たちが集わしめられている教会の頭であられる御方、罪を贖ってくださり、罪びとを救ってくださったあのキリストが臨在され、その御方によって代表される教会であるがゆえに、そこに集う者たちは、本来は、全てが聖であるのです。

つまり「キリストがもつ聖さ、その聖さによって聖められ、その聖さによって代表される群れが教会に属している。だから、集う人々は全て聖いはずなのだ」という意味です。しかし、その聖い御方によって集わしめられる私たちは「その聖い御方の御働きと憐れみによって、聖められつつある存在なのだ」ということが実状であると思います。

そうした御恵みに浴している私たちは「今や、調えられつつある群れであり、そういう途上の聖徒たちなのです」と言っているのです。御霊の助けによって聖化され続け、いつか再び主がおいでくださる時には『栄光の姿』に変えられる「そういう聖徒たちに、どうぞよろしく言ってください」と書いているのです。

第㉔節後半、

イタリア出身の人たちが、あなたがたによろしくと言っています。

「イタリア出身の」という言い方をしていますけれども、勿論、ローマの人々と言ってもいいのですが、イタリアからイエスを信じるようになった人々が多数出ましたから、イタリア出身とは「異邦人キリスト者（ヘレニスト）」を代表する」という意味なのです。

そして著者は、ユダヤ人キリスト者（ヘブライスト）に向かって、「あなたがたが、かつては野蛮な人間、世俗な人間と呼んでいたそのような異邦の人々たちから、あなたがたに対する深い思いやりや愛を示され、キリストの御恵みがあるようにと祈られていますよ」ということを、「イタリア出身の人たちが、あなたがたによろしくと言っています」という言葉で表しているのです。

自分たちが蔑まされても、「お前なんか価値がないよ、意味がないよ、駄目な奴らだ」と言われても、言われたクリスチャンは、そう罵る者たちのために祈り、（ある意味、霊的に高い立ち位置から）祝福を送る、それが本来の教会の姿なのです。
この世の者たちがどんなに悪く言い、どんなに差別し、どんなに無価値なものと見做し、無用な存在だと言おうとも、それによってひるんだり、おののいたりしては、いけません。そういう者たちのために祈り、その者たちに気づきが与えられ、悔い改めに至り、その者たちが幸いになるようにと、教会の人々は、主に在って働くことができるのです。

奢り高ぶる者のために祈りなさい、苦しめる者のために祈りなさい、蔑む者のためにも祈りなさい、そして、そのような憐れで残念な者たちに祝福をさえ送りなさい、というお勧めが、この短い言葉の中には秘められているのです。
第㉕節、
恵みがあなたがた一同と共にあるように。

今回は、この言葉で終わります。
今日の短い一節一節がもっている中身は、結局、私たちが考える教会論も含まれていましたし、あるいは、神によって聖められているという贖罪論も含まれていましたし、色々な教会の中で唱えられている基本的な教義と呼ばれる神学が一つ一つの言葉の中に組み込まれながら、語られていたと思います。

教会が教会であるというのは、教会外観が立派だからなのではない、そこに集まる人々が優れているからでもない、唯キリストが、贖われるあなたがたを選ばれて、そこに召してくださったことに起因しているのです。あなたがたは、キリストの贖いゆえに罪責は問われないが、尚も罪びとであるというジレンマのために、捨て鉢になってはいけません。それゆえに「キリストの御恵みによって、御血潮によって、聖め続けられているのです、もっと素晴らしい存在に変えられつつあるのです」ということを著者は語っているのです。

ですから、㉕節の最後の言葉を「何だ、これだけのことか」というように読まないで、この手紙の著者が、真摯な願いを込めて綴った結びの祈りは「キリスト教会の祈りは決してローカルなものではなく、『もっとトータルな形でこういう祈り願いを持っているのだ』ということを訴えようとして書いた言葉なのだ」と受けとめて頂きたいと思います。
色々なことがこの中にはありましたが、今日はこの辺で、後は、皆さんが学んで来られた今までの歩みの中から、示されたことを皆で語り合うのも、大事なことだと思います。
（1998年9月12日）

ここから森容子先生の説教です。
今月も森容子先生に説教をお願いしました。松山先生のテモテの試練のお話に鑑みて「神の試練」についてお願いしました。森先生は分かりづらい聖書箇所は原典で読み直して分かりやすく丁寧に紐解いてくださいます。感謝いたします。

「弱さを誇り、主を証したパウロ」

コリントの信徒への手紙 二　11章⑯節～㉝節　　森　容子

この31回目の松山先生の講述の中には、神の試練ということが何度か出てまいります。そのことについて、パウロの証しを通しても、考えてみたいと存じます。

⑯～⑱もう一度言います。誰も私を愚か者と思ってはならない。しかし、<u>もしそう思うなら、愚か者と思うがよい</u>。そうすれば、私も少しは誇ることができます。私がこれから話すことは、主に従って話すのではなく、愚か者なって自慢して話すのです。多くの者が肉に従って誇っているので、私も誇ることにします。

この聖書協会共同訳は、何度読んでも論旨に矛盾が感じられ、パウロの言わんとされることの意味が掴み切れません。と申しますのも、訳の一部に、以下の原典直訳とは相反するような訳が為されているからなのです。

もう一度私は言います。誰も、私を愚か者と思ってはなりません。しかし、<u>もし本当はそうでないなら（あなたがたが私を、本当は愚か者とは見做していないのなら）、私を（今回ばかりは）愚か者として受け入れてくださり</u>、私にもまた少し誇ることをさせてください。　　以下、原典訳中の（）は森の挿入

お証しの集会で、大変なご苦労の経緯や、闘病時の深刻な出来事をお聞きする機会があります。それが信仰にまつわる意義深いお証に結びついても、受け取りによっては「あの方のお話は、ご苦労自慢、お病気自慢ね」と揶揄される残念な小声を耳にすることがあります。そうした裏声を賢いパウロは先取りして、自分のこれからの話を、あえて遜って、「愚か者の誇り」と称したのでありましょう。

また、そうした話の相手先であるコリント教会の人々とは、厚い信頼関係に結ばれていることを前提としていたからこそ、この節のような表現を用いて、パウロは安心して正直に自分の体験談を語り始めることができたのでしょう。誰も彼の「誇り」を揶揄せず、誤解せず、反って互いの信頼度が増すだろうことを信じつつ・・。

しかし一方で、彼らの教会のうちには「ならず者」が潜んでおりました。彼らとパウロとの間を引き裂こうとする勢力としての・・。それでパウロは、自分と「ならず者」との間に弁えの線を引き、教会員たちに目を覚まさせるため、次のように述べているのです。

⑲～㉑a　賢いあなたがたのことだから、喜んで愚か者たちを我慢してくれるでしょう。実際、あなたがたは誰かに奴隷にされても、食い物にされても、奪い取られても、威張りちらされても、顔を叩かれても、我慢しています。恥を忍んで言いますが、私たちが弱かったのです。

ここも、やや分かり難いので、原典直訳を参照致しましょう。

というのも、あなたがたは賢い方々なので、喜んで愚か者たちを我慢しているからです。実に、誰かがあなたがたを奴隷にしていても、誰かが食い尽くしていても、誰かが利用していても、誰かが威張っていても、誰かがあなたがたの頭を打ち叩いていても、あなたがたは我慢しているからです。恥を承知で私は言いますが、私たちは（それほど、その“誰か”に対して）弱くなっていたからです。

このコリント教会の人々に耐え難い我慢を強いている「**愚か者たち**」とは、「偽使徒、ずる賢い働き手」であり、しかしてその正体は「サタンに仕える者」であるわけです。ですから、「**あなたがたは賢い方々なので、"喜んで“愚か者たちを我慢してくれる**」という表現は、パウロ特有の皮肉がたっぷり練り込められた、きつい警告であり、自己啓発への鋭い指摘に他なりません。

こうした、本当の「**愚か者たち**」が、裏でパウロたちの批判や、あらぬ誹謗中傷をさんざん繰り広げている事態を十分彼らに踏まえさせた上で、パウロは、自身の「肉の苦難にまつわる誇りの話」を語り始めなければなりませんでした。

㉑b－㉓b　**誰かがあえて誇ろうとするなら、愚か者になって言いますが、私もあえて誇ろう。彼らはヘブライ人なのか。私もそうです。イスラエル人なのか。私もそうです。アブラハムの子孫なのか。私もそうです。キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。**

偽使徒の彼らと自分とを引き比べてみてもしょうがないとパウロは重々承知していたでしょう。が、パウロが自分のルーツを誇らずにいられなかったのは、パウロを引き下げんとして、彼の出自を曲げて卑しめて語る輩が、コリント教会内に暗躍していたからなのです。その上で、パウロはやっと自らの過酷な体験談を語り始めます。

㉓c－㉕　**苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは数え切れず、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度、棒で打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜海上に漂ったこともありました。**

これを聞いて、単に「ご苦労自慢ね」と切り捨てる人はいないでしょう。皆一同に息を飲み、胸が痛くなる思いにかられたに相違ありません。これに対し何かコメントを求められても、一言もないでしょう。「パウロ先生、よくぞご無事で、これまで生き延びて来られましたね。唯々主に感謝です」としか言いようがありません。

これらのはかりしれない労苦に関しては、使徒言行録14章、16章等にも記載があります。しかし、パウロの受難は、これだけでは済みませんでした。

㉖～㉗　幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、苦労し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。

これらの難に関しては、使徒言行録の９章及び12～14章、17～21章，23章，25章や、第一テサロニケ２章等にも記載があります。ですが、それら一つ一つの難を丁寧に紐解こうとすれば、何年かかっても語り切れないお話があるでしょう。
しかしながら、これらは無論「ご苦労様行脚の品評会」ではありません。それゆえに、特に「**苦労し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。**」の件を是非とも原典直訳でお伝えしたいのです。

重労働による過労の中に置かれ、何度も眠れずの夜を過ごし、飢えと渇きの中に置かれ、何度も断食をし、寒さと裸の中にも置かれました。

つまり、この文章は受身形で書かれ、パウロを使徒として選び、導かれてきた御方である主が、彼をあえてそのような非常に過酷な立場に置かれたという告白文です。ですから、単なる天災や人災に遭ったというお話ではなく、ましてや、冒頭にパウロが語った「愚か者が苦労話を誇る」ことでも何でもありません。これは主イエスにまつわる、立派な信仰の証しなのです。
こうした幾多の試練を特別に主から選ばれて給わったパウロだからこそ、次のような素晴らしい信仰告白を為すことができるのです。

㉘～㉚　このほかにもまだあるが、その上に、日々私に押し寄せる厄介事、すべての教会への心遣いがあります。誰かが弱っているのに、私も弱らずにいられるでしょうか。誰かがつまずいているのに、私が心を痛めずにいられるでしょうか。誇る必要があるなら、私の弱さを誇りましょう。

「**誰かが弱っているのに、私も弱らずにいられるでしょうか。誰かがつまずいているのに、私が心を痛めずにいられるでしょうか。**」いう立場はまさに、主イエス・キリストの似姿そのものでありましょう。
また「**私の弱さを誇**」るということについては、次の12章⑤においてパウロは「**私自身については、弱さ以外は誇るつもりはありません。**」とまで言い切っているのです。

㉛～㉝　主イエスの父である神、永遠にほめたたえられるべき方は、私が偽りを言っていないことをご存じです。ダマスコでアレタ王の代官が、私を捕らえようとして、ダマス

コの人たちの町を見張っていたとき、私は、窓から籠で城壁伝いにつり降ろされて、彼の手を逃れたのでした。

この出来事は、使徒言行録の９：㉓－㉕にあり、パウロが未だサウロと名乗っていた時代、キリスト者を捕縛する側の人間だった頃、復活のイエス様に、三日間盲目状態にされ、自分の魂、肉体という実在を鷲掴みされるようにして捕らえられ、悔い改めに導かれると共に、キリストの使徒のひとりとなされた直後の出来事で、ダマスコで難を逃れ、命を護られたことは、主の御業以外の何ものでもありません。
その直前の記事、使徒言行録９：⑲ｂ－㉒も味わいましょう。

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、すぐ諸会堂で、『この人こそ神の子である』と、イエスのことを宣べ伝えた。これを聞いた人々は皆、驚いて言った。『あれは、エルサレムでこの名を呼ぶ者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。』しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。

Ⅱコリに戻りまして、11：㉛の「**主イエスの父である神、永遠にほめたたえられるべき方は、わたしが偽りを言っていないことをご存じです**。」というパウロの宣言は、11：⑪でも「**神がご存じです**」と高らかに述べており、この言葉はこの先、パウロが第三の天にまで引き上げられたという幻の体験を述べた12：②，③でも宣言され、パウロにとって「**神がご存じです**」という宣言は、言わば「水戸黄門の印籠」ごとき、いやそれ以上の有無を言わせぬ、天的な権威の印となっておりました。

ですが、この「**神がご存じです**」という言葉は、時に大きな誘惑を孕む大変危険な言葉になりうることには、厳重な注意を要します。この言葉をみだりに、特に偽って用いることは、十戒の第二戒を冒す大罪で、命の危険が伴うことを肝に銘じるべきです。ですが、誰よりも律法を深く学んできて、その危険性を重々承知するパウだからこそ、胸を張って堂々と「**神がご存じです**」を用いることができたことも、主の御心であられましょう。

かくして、かつてダマスコにおいてキリスト者たちを捕縛する使命に血道をあげていたパウロは、主の御光に打倒されて、魂も肉体も主に鷲掴みに為されて以来、片時も主から離されることはありませんでした。襲い掛かってくる大苦難も、大迫害も主からのものと受けとめて耐え切り、全身全力で主を証し、主を宣べ伝え、これ以上はない感謝と喜びのうちに、殉教の死を迎えました。今や天に在って、祭司として御父とキリストにお仕えしているでありましょうパウロは、主イエス様の、真にあっぱれで見事な御作品です。

私たちの弱さにも至らなさにも格別の御慈愛と御力を注いでくださり、与えられた試練を共に担われ、それをついには、こよなき益とも、最高の幸とも成してくださる御方、主イエス・キリストをほめ讃え、心を尽くして感謝の黙祷をお献げ致しましょう。

写者あとがき

㉒節から㉕節は、短い最後の挨拶として読み終わってしまうところですが、松山先生はその短い文章に秘められている色々な意味を掘り下げ、かつ分かりやすく解説されています。洞察力の極みを感じます。
著者は「手短に書いた『神の御言に聞き従いなさいと』いう勧めの言葉を受け入れてください」と力をこめて嘆願しています。著者と松山幸生先生が一緒になって私たちに勧告しているようです。そしてヘブライ人への手紙の内容を一言で表現しています。
「勧めの言葉」は説教である。説教は「神によって語ることが許された人間が、神の御恵みにより示された御言を、人間の知情意により選び出す言語を駆使して説き明かし、人々に語っている。」松山先生の説教の姿勢を語っています。
聞く者、私たち信徒にとっても重要な内容を以下に引用します。

「人間の言葉は、その人間の有する限られた言語でしかない」けれども、「神がそれを用いて、一人ひとりの心に働きかけてくださるように」という祈り願いをもって、その言葉を十分に吟味しつつ語ってゆく時に、神がそれに意味を持たせられ、説教者の言葉を生かされる。一方、聴く者を罪への気づきから、主の解放へと至らせ、その人を喜びに満たし、その人の人生を幸いと成してゆく。そういう『御霊の働き』がその言葉に伴う。そういうことを説教者が信じ感じ取って語ってゆくのでなかったならば、説教は説教にならないだろう。
また、聴く者も「あれはあの先生が語っているのだ」という姿勢で聴くのではなく、説教者の言葉を通して「神が私にどう働いてくださるだろう」と期待しながら、『神の御言と出会う』のでなかったならば、説教は説教にならないだろうと思うのです。（引用）

説教を聞く私たちは心を空にして牧師先生の語られる言葉をまっすぐに素直に受け入れることによって神の言葉として受けとめることができる。「説教を聞くこと」が信仰の第一歩と言われる所以であることを思い起こさせてくださいました。

更に、㉒節前半の
「**そういう勧めの言葉を受け入れてください**」とは、
かつて自分たちが救いを（凝縮させた形で）選民だけのものとして捉えようとしていた発想が打ち砕かれて、「真に神の御前に救われた者、福音を宣べ伝える者、イエス・キリストに従う者、更には、律法を超えた者として、与えてくださった救いと贖いを、多くの人たちに宣べ伝えてゆこうではありませんか」という「勧め」が受け入れられることを願っているのです。（本文からの引用）
このことを言われますと宣教に消極的な自分の信仰を見つめて唯々懺悔するのみです。
もう一つ松山先生が付け加えられておられることは、（最近私自身が経験していることですが）
「説教する牧師は究極のところ『キリストの十字架と復活を毎週毎週繰り返し語る、怯まないで語り続けることによって、信徒は救いに到達することができると信じて毎週講壇に立っておられる、立たしめられている」ということです。毎週御言葉を解き明かしされる

牧師先生の厳粛な姿勢、知情意のあらん限りのエネルギーを結集して準備されるお姿を想像して、聞く態度の生ぬるさを反省しております。しっかり応答していかねばならない。聖日礼拝は体調を整え、心を清浄にして、主のみ前に立たなくてはならないと反省しています。

テモテの釈放について
ここではテモテがどんな患難に会ったかは書いていませんが、松山先生は12章に戻り、テモテへの賛歌を送って、彼が忍耐した艱難についての説明が加えられています。テモテが受けた投獄中の艱難を思いながら、神の御心を行って約束されたものを受けるためには忍耐が必要なのですと書いています。

㉓㉔「約束してくださったのは、真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようにしっかりと保ちましょう。互いに愛と善意に励むよう心がけ」と語り、「その艱難を超えて神が何をしてくださるだろうか。」「神の大きなお恵み」に目を向けて生きることが私たちの信仰ですよと勧められている。神は耐えられないような艱難はお与えになられないが、艱難を克服するために、私たちが強められ、新たな艱難に立ち向かう勇気と希望が与えられ、新しい課題への出発が告げられる。
テモテに早く会いたい、共に新しい課題への向かいたい、という著者の気持ちを松山先生は汲み取っておられるのです。

このテモテの文脈で松山先生がご自分を投影されたような文章があります。
「この時代において「信じることと、忍耐するということとは、ほぼ同じ意味をもった、同じ強さをもった言葉』として語られています。「神を信じるのであれば、現実の中にある様々の矛盾や、迫害、様々な不都合を、意味あるものとして耐え忍んでください。なぜなら、キリスト御自身がそうした欠乏の中をあえて歩まれたのですから」と。
松山先生は牧師として現実の社会に直接出て行って「然り、否」を、体を張って訴えられた。剣の代わりに持った武器は「御言と忍耐」であったと私は思います。

挨拶の最後に出てくる「聖なるもの」とはクリスチャンのこと。まさしく現代の私たちに向かって挨拶をしてくださっている。
その内容は「キリストがもつ聖さ、その聖さによって聖められ、その聖さによって代表される群れが教会に属している。だから、そういう人々は全て聖いはずだ」という意味です。
その聖い御方によって集わしめられる私たちは『その聖い御方の御働きと憐れみによって、聖められつつある存在なのだ』ということでもあると思います。
そうした御恵みに浴した私たちは『今や、御国の住人として調えられつつある群れであり、そういう聖徒たちなのだ』と言われているのです。「御霊の助けによって聖化され、再び主がおいでくださる時には『栄光の姿』に変えられる、そういう聖徒たちに、どうぞよろしく言ってください」と著者は挨拶してくださっているのです。

最後の短い挨拶の内心にある著者の思いも含めて松山幸生先生が、手短に、キリスト論、教会論、贖罪論を説明してくださっています。松山先生のいつも変わらない深耕が展開され最終章が終わりました。次回はいよいよ第32回、この最終回はまとめです。

小原靖夫記